

〈次回予定〉

二〇一三年六月十五日(土)午前十一時より

紫友会館二階会議室

夏の季の句を三句作ってお出でください

お待ち申し上げます

紫友さろん第三十八回句会

二〇一三年三月十六日(土)

競漕の一挺身に風光る

三郎

据膳を前に春眠破れたり

土果

紫友さろん第三十七回句会

二〇一二年十二月十五日(土)

熊打ちの一音残し山暮るる

三郎

わが供花は一輪で足る野水仙

三郎

遭難碑に日の温みあり山眠る

三郎

〈頂いたお葉書から〉

いつもご案内をご送付いただき感謝して居ます。土曜日はあいにく都合がつかず失礼しています。

去る九月に、西安と敦煌へ旅しました。一、二と十一、十二は西安で、三、十は敦煌です。皆様によろしく御伝声下さい。

一 秋気澄む孔雀をせつつくアヒルかな

二 歩調とる黄色の僧衣塔の秋

三 大西日沙悟浄いづこ月牙泉

四 残暑酷ラクダに揺るる鳴沙山

五 夏の果て玉門関のひつじ草

六 ゴビの原秋の逃げ水見つつ行く

七 木洩れ日や大房垂るる青葡萄

八 陽関や家なし道なし天高し

九 悪い人に仏盗られし秋の窟

十 お足元にお気をつけ下さい法師蟬

十一 亭々と常磐木聳ゆ碑林秋

十二 二千年待機の兵馬秋気満つ

紫友さろん第三十六回句会

二〇一二年九月十五日(土)

秋祭り山車引く子らのしたり顔

市原

秋茄子に思ひをよせたり白磁皿

曙

日ぐらしや沈む夕日に鳴き急ぐ

市原

うす紅にそまつて梢春近し

桃芳

茜さす雲高くあり秋暑し

倉林

春眠や夢の通ひ路閉じぬまま

土果

天高く絵馬の馬にも精気満つ

曙

風光る語らひはずむ散歩路

市原

入賞の友の かつぴつ 涼しかり
渴筆

三郎

竹刀取る梅の古木の構え哉

久典

老いていま友語り初む原爆忌

三郎

紫友さろん第三十三回句会

二〇一一年十二月三日(土)

紫友さろん第三十五回句会

二〇一二年六月十六日(土)

母逝けり ひたき 日毎に窓に寄る
鶺鴒

久典

余生にもけじめはあらむ更衣

三郎

スクラムの雄叫び透る寒の入

三郎

父母の忌のいとこはとこや夏座敷

三郎

今年米ははの里から亡き母へ

久典

古寺の老いたる木々や若もみじ

倉林

懐手とかずに聴けり子の主張

三郎

紫友さろん第三十四回句会

二〇一二年三月三日(土)

紫友さろん第三十二回句会

二〇一一年九月十七日(土)

頬染めて膝崩しけり桃の花

土果

操帆の をみな の下知や秋日濃く
女

三郎

秋風に猫は寝床をかえはじめ

桃芳

孫たちも祖母を看取れり星流る

久典

紫友さろん第三十一回句会

二〇一一年六月四日(土)

線香のの字涼しや閻魔堂

土果

父の背にとびつく男児五月鯉

久典

指揮者待つ楽員の黙夕薄暑

三郎

菖蒲湯や児らの燥ぎし日の遠く

三郎

紫友さろん第三十回句会

二〇一一年三月五日(土)

春近し思わぬ方に飛行船

三郎

梅の影一寸ばかり縮みけり

倉林

いつ来るか娘嫁ぐ日雛納め

市原

二月尽く小寺の雨に濡れながら

土果

春めけば湯島天神おんな坂

土果

寒灸や百会に残る火の匂ひ

三郎

里山にいのちみちたり百千鳥

久典

先達を見送りし夜や春の雪

倉林

孫たちの婚の宴や百千鳥

久典

紫友さろん第二十九回句会

二〇一〇年十二月四日(土)

小春日の家陰避けゆくまち歩き

倉林

蒼ざめて咳する街の灯かな

土果

冬の星律気にともる団地の灯

倉林

立冬や陶土搗く杵夜もすがら

三郎

歳の瀬を鴉の低く掠めけり

土果

紫友さろん第二十八回句会

二〇一〇年九月四日(土)

対岸の声よく透る秋日和

三郎

稲の香に浸る農夫の黻深し

三郎

天の川ぼくらはなんどデートかな

久典

七輪の出番来れり初秋刀魚

三郎

道場の畳に残る暑さかな

土果

紫友さろん第二十七回句会

二〇一〇年六月五日(土)

大の字や開けっぴろげの五月晴

土果

兄弟子の胸借る土俵声涼し

三郎

松籟に身の洗はるる立夏かな

三郎

紫友さろん第二十六回句会

二〇一〇年三月六日(土)

春雷をまぢかに聞けり古戦場

三郎

登校の列乱る坂春の雪

久典

誰が筆や雛を覆ひし古手紙

土果

紫友さろん第二十五回句会

二〇〇九年十二月五日(土)

海橋の締むる一湾初景色

三郎

七五三きりりつしやんとばばいたり

久典

面影の忘れ難きを雪が降る

土果

紫友さろん第二十四回句会

二〇〇九年九月五日(土)

老の坂追い来る風の秋めきて

土果

風雨止む網戸すかして虫の闇

久典

昭和史を読む天窓や晩夏光

三郎

紫友さろん第二十三回句会

二〇〇九年六月六日(土)

枇杷の実の青きは青く匂ひけり

土果

ザッと来て上がれば元の照り返し

桃芳

群雲を捕ろうとかざす虫捕網

願達

紫友さろん第二十二回句会

二〇〇九年三月七日(土)

スクラムの踏張る大地草萌ゆる

三郎

満潮やのっそり出づる春の月

三郎

この枝のこの芽の春や風渡る

土果

すぐろの

の光とけあふ遊水池

三郎

末黒野

まんさくのやさしき風を待ちにけり

土果

花車ひよどりがいて舞い落ちる

桃芳

あでやかなひが桜にめじろくる

桃芳

触わりたし我慢で見上げ内裏雛

曙子

白梅に湯の香混じりし鄙の宿

曙子

紫友さろん第二十一回句会

二〇〇八年十二月六日(土)

孫帰国ポインセチアの玄関に

久典

小雀の群れて華やぐ冬木立

土果

野良猫も寄り来る朝や霜の立つ

土果

着ぶくれて老いを諾う影法師

三郎

心得し鴉の残す木守柿

三郎

雲低く黒き峰々神無月

悟茶

冬蝶思わず送る応援歌

曙子

人恋し人ごみわたる年の市

久典

紫友さろん第二十回句会

二〇〇八年九月六日(土)

余生なほ試練あるべし稲びかり

三郎

出でて座す本蔵に似て秋蛙

小野寺

この街も人恋しげに秋時雨

土果

秋の蝶一息入れる畑仕事

久典

おしろい
花やばばにくれたる髪飾り

白粉
久典

紫友さろん第十九回句会

二〇〇八年六月七日(土)

殉難のいしづみ
碑 洗う走り梅雨

三郎

旅半ば麦秋に目の眩みゐて

三郎

巡礼の白際立ちて若楓

曙子

紫友さろん第十八回句会

二〇〇八年三月一日(土)

露味噌のかすかに苦き一人膳

遊心

春泥やふるさとの道下駄の道

土果

木蓮のみな天を指す花芽かな

土果

海難の船笛長し春の雪

三郎

紫友さろん第十七回句会

二〇〇七年十二月一日(土)

巨木立つ僧もくもくと落葉掃き

久典

一湾に船影あらず初御空

三郎

母の味忘れて久し雑煮椀

三郎

紫友さろん第十六回句会

二〇〇七年九月一日(土)

こうろぎの鳴くや残暑のすき間から

桃芳

自分史の序文おこせり秋立つ日

久典

残り蚊のひと刺しあつて日の暮るる

土果

紫友さろん第十五回句会

二〇〇七年六月二日(土)

風鈴の音聞え来て街ゆかし

早坂

名護屋城虹のあなたに何を見き

久典

紫友さろん第十四回句会

二〇〇七年三月三日(土)

行く水や春陽のはねる音もなく

土果

ジヨギングの足の軽さに春はそこ

久典

風ありて幾万の芽の吹きしかな

土果

日矢こぼす如月の雲ノーサイド

三郎

紫友さろん第十三回句会

二〇〇六年十二月二日(土)

湯豆腐の白なめらかにひとり酒

遊心

畳替えまず大の字になつてみて

土果

落葉踏む音のかそけし女坂

三郎

紫友さろん第十二回句会

二〇〇六年九月二日(土)

ひぐらし
や旅愁かきたつ一の膳

三郎

老犬の歩み緩めし残暑かな

曙子

紫友さろん第十一回句会

二〇〇六年六月三日(土)

父の日や午睡を誘ふ
遠とお 郭公

三郎

遠雷や抜き手の少女きらめきて

三郎

ひとのみに太陽食らう雲の峰

知行

紫友さろん第十回句会

二〇〇六年三月四日(土)

歩みより流れを早む春の川

三郎

しじゅうからけやきの梢あからみて

桃芳

紫友さろん第九回句会

二〇〇五年十二月三日(土)

まどろみのうまい
熟寝 となりし去年今年

三郎

老いてなほ本音を吐かず冬帽子

三郎

団欒や骨刺す風は窓の外

土果

木洩れ日を吹き蹴散らすや空つ風

知行

舟揚げる湖畔に立てり冬日射す

知行

紫友さろん第八回句会

二〇〇五年九月三日(土)

離陸機の黒点となる天高し

三郎

二つ目の咄笑へず秋扇

三郎

野の花の枯るるは枯れてありにけり

土果

新暦と旧暦の差の暑さかな

桃芳

今朝いくつ咲いた朝顔空高し

桃芳

虫の声家まで続く帰り路

知行

紫友さろん第七回句会

二〇〇五年六月四日(土)

昼寄席の嘶しんみり梅雨きざす

三郎

ひんやりと涼風よぎる街木立

光平

子つばめの五つ並んだ赤き口

桃芳

草笛や疎開せし日の遙かなる

三郎

七七忌切れぬ縁を桐の花

土果

紫友さろん第六回句会

二〇〇五年三月五日(土)

そと小雪ケースの中は華やぎて

桃芳

吹き過ぎた春一番のあと寒さ

桃芳

ふつくらと紅の膨らむ梅の枝

文子

騒がしく小鳥さえずり春の朝

光平

人の顔満開にする梅の花

光平

紫友さろん第五回句会

二〇〇四年十二月四日(土)

記録を紛失

紫友さろん第四回句会

二〇〇四年九月四日(土)

いつときは樹々静まれり秋時雨

土果

鈴虫の音にさそわれる寒さかな

文子

秋の風心静かにしみて来る

光平

築十年隙間風吹く居間の中

文子

虫の音を追いかけてくる秋の風

文子

強い風激しい雨にすくむ秋

光平

アシカの子秋刀魚グルメでふくよかに

知行

亡き兄を偲びて歌う秋風の詩

知行

紫友さろん第三回句会

二〇〇四年六月五日(土)

夕風の海の彼方の白帆かな

閑居

喝采の一振り空し西瓜割り

三郎

合宿の雄叫びやまず晩夏光

三郎

風微か毛虫ぶうらり糸の先

土果

紫友さろん第二回句会

二〇〇四年三月六日(土)

春浅き鷺は水辺の忍び足

克

世の中は冷たい風吹く弥生かな

文子

冬の句囀りに司祭つまづく野外ミサ

三郎

通勤路変えて見に行く紅の花

文子

合格の知らせうれしく独酌す

知行

梅林のほどよき頃の初音かな

克

巨船押す小さき曳船山笑ふ

三郎

紫友さろん第一回句会

二〇〇三年十二月六日(土)

好々爺にまだなり切れず冬鏡

三郎

展帆を眩しむ埠頭冬うらら

三郎

電飾の哀しからずや人の群れ

克

寒椿受験の日には見たくない

文子

積もる雪跳ねても見えぬ犬の足

文子

鏡餅今年の火星を橙に

文子